

太屋敷遺跡発掘調査報告書

—平成2年度の調査—

1991

寺泊町教育委員会

序

平成2年の秋に行われた太屋敷遺跡の発掘調査が大きな成果をおさめ、ここにその報告書が刊行されますことに対し、関係諸氏のご尽力に深く敬意を表します。

太屋敷遺跡は、昭和51年から昭和59年の4次にわたり学術的な発掘調査を行ってきた「横滝山庵寺跡」の関連の遺跡と考えられ、昭和60年には確認調査が実施され「京田・太屋敷・日光畑遺跡発掘調査概報」として既に報告書が刊行されている遺跡の一部にあたります。また、寺泊には、西山丘陵を始めとする丘陵地帯や島崎川流域に、先人の築いた遺跡が数多く点在しています。一方、昨年は隣の和島村の八幡林遺跡において、歴史的な発見があったとも聞かれています。

近年、社会の急速な変化によって私たちの生活環境も大きく変化し、それにとまなう開発事業も数多く計画されています。これらはまた、大切な文化遺産が破壊の危機にあるとも言えます。

本来、こうした遺跡は、私たち郷土の歴史的遺産として、現状のまま保存し後世に伝えていくことが、現代に生きる私どもの責務であると考えます。しかし、開発のためやむをえず事前に発掘調査を行い、記録保存の形をとらざるを得ない場合も生じます。今回の調査も、スーパーマーケットの出店と言う寺泊町の活性化には避けて通れない開発計画により行った発掘調査であり、したがってその範囲も必要最小限のものであります。

この調査により、多数の井戸や土坑など、古く数百年前の人間の生活や風習を偲ばせるものが数多く発見されています。ここに立ち、遠く越後山系を眺望した当時の風景はどのようなものだったのでしょうか。まさに古代のロマンを限りなく広げてくれる調査でありました。

詳細は、本報告書に譲ることといたしますが、この報告書の発刊にあたりまして、和洋女子大学の寺村光晴教授及び同博物館学研究室の駒見和夫氏をはじめ、新潟県文化行政課の諸氏のご指導、また調査にご協力をいただいた方々に、改めて深甚なる謝意を表する次第であります。

平成3年3月

寺泊町教育委員会 教育長 長谷川 達 栄

例 言

1. 本書は、株式会社マルイが寺泊町敦ヶ曾根地内のスーパーマーケット出店計画にともなう、太屋敷遺跡発掘調査の報告書である。

太屋敷遺跡は、新潟県三島郡寺泊町大字敦ヶ曾根字太屋敷218番地1他である。

2. 調査にあたり、株式会社マルイと事前の協議を行った。
調査の範囲は、駐車場等により遺跡が破壊される部分のみである。
3. 調査は、平成2年9月5日から同年9月16日までの間、寺泊町教育委員会（教育長 長谷川達栄）が、株式会社マルイとの委託契約に基づき実施した。
4. 遺物の整理及び報告書の作成は、平成2年10月から平成3年2月にかけて行った。
5. 本書の執筆は、寺村光晴監修の下、II-(1)発掘調査に至るまでを寺泊町教育委員会事務局 星博が、他は駒見和夫が行った。なお、調査組織については巻末に記してある。
6. 出土遺物は、寺泊町教育委員会が保管している。
7. 本発掘調査には、各方面から公私にわたり物心両面の多大なご援助とご協力をいただいた。ここに、衷心より厚く御礼を申し上げる次第である。

目 次

序	寺泊町教育長 長谷川達栄
例 言	
I 遺跡の立地と環境	1
II 発掘調査の経過	3
(1) 発掘調査に至るまで	3
1) 既往の調査	3
2) 調査に至る経緯	4
(2) 調査の経過	4
III 調査の概要	6
(1) 遺跡の概観と調査方法	6
(2) 遺 構	9
1) 井 戸	9
2) 土 坑	15
3) 小 穴	18
4) 溝	18
5) その他の遺構	19
IV 出土の遺物	20
(1) 平安時代の土器	20
1) 土 師 器	20
2) 須 恵 器	20
(2) 中世の陶磁器類	21
1) 珠 洲 焼	21
2) 磁 器	23
(3) 木 製 品	24
(4) 石 器	28
(5) 鉄関係遺物	28
V ま と め	29

挿図目次

第1図	周辺の地形と古代・中世の主な遺跡の分布	2
第2図	発掘調査区域	6
第3図	第1区遺構配置	7
第4図	第2区遺構配置	8
第5図	井戸 (SE2・4・8・10)	10
第6図	井戸 (SE11・12・13・14・17)	12
第7図	土坑 (SK4・5・6・12・14・19)	16
第8図	竪穴状遺構 (SX1)	19
第9図	出土土師器・須恵器	21
第10図	出土珠洲焼	22
第11図	出土白磁	23
第12図	出土木製品 (1)	25
第13図	出土木製品 (2)	26
第14図	出土石器	27
カット1	北より発掘区 (第1区) を望む	5
カット2	SE2の発掘	28

図版目次

図版第1	遺跡	1. 太屋敷遺跡全景 2. 第1区全景
図版第2	遺跡	1. 第1区東側部分 2. 第1区北側部分
図版第3	遺跡	1. SE2 2. SE4 3. SE7 4. SE10 5. SE11 6. SE12土層断面
図版第4	遺跡	1. SK14 2. SK14 3. SX1 4. 第2区全景
図版第5	遺物	土師器、須恵器、珠洲焼、白磁
図版第6	遺物	漆器、曲物、杓子、絵描板状木製品、箱物、箸状木製品、棒状木製品、 桜樹皮、彫刻が施された木製品、四角柱状木製品、井戸側部材
図版第7	遺物	井戸側部材、杭、鉄滓、棒状の鉄器、赤漆塊、葦、磨石

I 遺跡の立地と環境

太屋敷遺跡は、新潟県三島郡寺泊町大字教ヶ曾根字太屋敷に存在する。

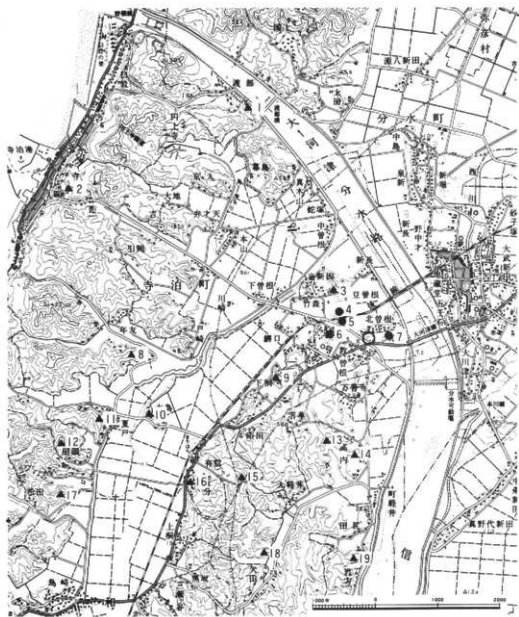
この地は新潟県のほぼ中央部、中越地方の海岸寄りにあたる。中越地方には海岸線に並行して、地質的には新第三系からなる低丘陵の西山丘陵が走っている。西山丘陵は妙高南麓より北走する東頸城丘陵の支丘で、柏崎平野東端から東部西山丘陵と西部西山丘陵に分かれて並走する。東部西山丘陵は本遺跡西側の横滝山を北端とし、西部西山丘陵は弥彦山、角田山へと連なる。西山丘陵には主尾根に直交する方向に支尾根が延び、その間に奥行の深い支谷が樹枝状に入り込んでおり、谷あいには集落が点在している。

西山丘陵の東側には信濃川が北流し、その中・下流に広大な新潟平野が展開する。また、東部西山丘陵と西部西山丘陵の間には、西山町砂田と出雲崎町市野坪の間にある分水嶺より発する島崎川が北流し、新潟平野南部に続く細長い沖積平野を形成している。島崎川は、大正12年通水の大河津分水閘削前まで、本遺跡の北東付近で中ノ口川に合流していたが、古くは旧円上寺湖に流れ込んでいたものといわれている。今日では、島崎川はいくつかの放水路によって直接日本海に放流され、湖は干拓され水田のひろがる沖積地となっている。しかし往時の姿は、潟湖、自然堤防と後背湿地から構成されていたと思われる。このような中での自然堤防上に、太屋敷遺跡は位置している。

本遺跡周辺には、縄文時代から中世に至る間の遺跡が少なからず存在している。旧円上寺湖周辺の丘陵上および湖畔には、縄文・弥生時代の遺跡が多くみられる。本遺跡の北西約600mにある諏訪田遺跡は、標高約12mの沖積微高地上に位置するもので、弥生時代中期後半の土壌墓が発掘され、管玉や同未成品、剥・屑片などが出土した。

一方、低丘陵上や低地の自然堤防及至微高地上には、奈良・平安時代の遺跡が多く存在している。本遺跡の西方約700mに位置する横滝山廃寺跡では、木造基壇外装の建物跡や礎石抜き取り穴などの遺構とともに、鶏尾・埴仏をはじめとする多数の瓦類や土器が出土した。すなわち、本格的な古代初期寺院であったことが解明されている。また、横滝山の北側沖積地にひろがる京田・諏訪田遺跡では、区画を意図した企画性のある溝や建物跡、セイロ組井戸側を持つ井戸などの遺構とともに、瓦や土器などの遺物が出土しており、官衙的な様相を呈している。

中世の遺跡としては、本遺跡の東約300mの同一自然堤防上に日光畑遺跡がある。珠洲焼などが採集されており、本遺跡と一連の遺跡と考えられる。また、周辺地域には城館跡が多く知られている。寺泊町内には現在18城館が確認されており、いずれも山城（要害）である。その中で大字夏戸に所在する夏戸城跡は、規模や防衛施設などにおいて他よりぬきんでいる。夏戸城は越後守護上杉氏の家臣志田氏の居城である。『志田系図』によると、志田景秀



第1図 周辺の地形と古代・中世の主な遺跡の分布

○太尾敷遺跡 ▲城館跡 ■寺院跡 ●集落跡等

- | | | | |
|----------|----------|----------|---------|
| 1、澁辺城跡 | 2、赤坂山城跡 | 3、竹森城跡 | 4、諏訪田遺跡 |
| 5、京田遺跡 | 6、横流山廃寺跡 | 7、日光畑遺跡 | 8、年友城跡 |
| 9、和田城跡 | 10、木島城跡 | 11、夏戸城跡 | 12、田沼城跡 |
| 13、高内北城跡 | 14、高内城跡 | 15、五分一城跡 | 16、稲葉城跡 |
| 17、万能寺城跡 | 18、板橋城跡 | 19、全ヶ崎城跡 | |

の時に越後国守護上杉房方（1421年まで守護職）より夏戸の地を賜ったとあるが、夏戸城築城の時期は史料がなく明らかでない。城跡は西山丘陵の尾根先端に位置し、頂部の主郭での標高は66mである。馬蹄形状の尾根や入り組んだ谷、周囲の沼沢地などの天然の地形を要害として堅固に築かれており、城跡の全体規模は約600m×200mにもなる。曲輪・土塁・空堀などの遺構は戦国期の根小屋式山城の特色を持つものであるが、長い間に改造、強化されたものとの指摘がある（鳴海忠夫『寺泊町の城跡』、『寺泊町史研究』第1号 1985）。城の東下の夏戸集落には、「館ノ上」「館ノ内」「館小路」「上町」「中町」「下町」などの地名が残っており、居館を中心に小規模な城下を形成していたことが推測される。夏戸城跡周辺には年友城跡、木島城跡、田頭城跡、伊那古城跡など多くの城砦群が分布しており、その規模や施設の面から見て、夏戸城はそれらの中心的存在であったと思われる。

この他に、本遺跡と地理的に近く関係が深いと考えられる城に竹森城跡がある。標高20mの小独立丘上に位置し、主郭・出丸・帯曲輪などの遺構が残り、約300m×250mの縄張りを持つ。城に関する記録は、文明年間（1469～1486）に岩井國防守が居城したと『温古の栞』にあるのが唯一で、その前後は定かでない。竹森城は、眼下に本遺跡を含め島崎川の沖積地をひろく見渡している。

また、中世において寺泊町は佐渡への渡航港湾として発達した。14世紀以降は日本海の拠点的海港を結んだ交易が隆盛で、寺泊港もその一翼を担っていたものと思われる。能登地方の珠洲焼なども、この日本海交易によってもたらされていたことが、寺泊沖の通称クラバから底曳網によって揚陸されることから知ることができる。さらに、この時期は河川交通も発達していた。信濃川流域の六日市（長岡市）、黒津（同）、大河津（寺泊町）、四日町（三条市）などの地名は、舟運の津ないしこれに関係する市場町の名残だとされている（中野堂任「第2節中世の道 一布と市」『新潟県史』通史編2中世 1987）。本遺跡の南東約1.2kmには河港大川津がある。西古志地方から蒲原地方へ通じる街道とあわせて、中世の太屋敷遺跡は交通の要衝に位置していたものと思われる。

II 発掘調査の経過

(1) 発掘調査に至るまで

1) 既往の調査

横滝山及びその周辺（京田・太屋敷・日光畑）は、以前から「土器片」などが採取され埋蔵文化財包蔵地として注目されていた。

特に、新潟県の指定記念物に指定された「横滝山廃寺跡」の遺跡は、昭和51年・57年・58

年・59年の4次にわたり、学術的な発掘調査を行ってきた。その結果、横滝山周辺の京田・太屋敷・日光畑遺跡などと横滝山廃寺跡との関係が注目され、その重要性が高まり、昭和60年に京田地内の「畑地改良事業」を契機に、京田・太屋敷・日光畑遺跡の確認調査が実施され、『京田・太屋敷・日光畑遺跡発掘調査概報』として報告書が刊行されている。

太屋敷遺跡では、遺構確認のトレンチが自然堤防を横断するように、南北に入れられ（長さ53.5m、幅1.5m）、溝・土坑・小穴が多数検出されたが、建物跡と明確に断定できるまでは至らなかった。遺物は土師器・須恵器片が20点ほど出土している。これらのことから、平安時代を中心とした遺跡であろうと推定されていた。

2) 調査に至る経緯

株式会社マルイ（見附市）が、寺泊町大字敦ヶ曾根字太屋敷及び七百地地内にスーパーマーケットの新店を計画し、平成2年4月20日付けで寺泊町農業委員会に農地法5条に基づく農地の転用申請を提出した。これについて平成2年5月24日付けで、新潟県知事から転用許可が出された。㈱マルイは直ちに造成工事にとりかかった。

平成2年8月になり、太屋敷遺跡において表土が取払われ、遺構らしきものが露出していることが分かった。そこで、急遽8月20日に新潟県文化行政課と協議を行うこととなった。幸い店舗建設地ではなく駐車場予定地であったため、県文化行政課の藤巻正信主任より現地の調査をお願いした。この結果、発掘調査が必要であるとの判断が下された。調査範囲は前記の確認調査を行った箇所西側にあたり、前回トレンチを入れた箇所は含んでいない。

発掘担当者については、和洋女子大学の寺村光晴教授にお預りし、同氏と同大学博物館学研究室の駒見和夫氏が調査主任として派遣されることとなり、調査期間を平成2年9月5日から9月16日までの12日間とすることに決定した。

これを受けて、平成2年9月3日付けで文化財保護法57条の2による工事の届を㈱マルイが行い、また寺泊町教育委員会は同日付けで同法98条の2に基づく発掘調査の届を文化庁長官宛提出した。

また、㈱マルイと発掘調査の方法・経費その他について協議を行い、9月4日付けで委託契約を締結した。

(2) 調査の経過

発掘調査は、平成2年9月4日から9月15日までの延べ12日間にわたって実施した。

9月4日 関係者全員が現地に集合し、地区設定など発掘調査の諸準備を整えるとともに、今後の打合せを行う。

9月5～7日 第1区において、まだ残っている覆土を重機で除去し、全体の精査を行う。N1ラインからN12ラインの間にかけて、井戸や土坑、小穴などの遺構が集中して検出された。また第1区北側の緩斜面に、東西方向に走る小溝SD1を検出した。

9月8～10日 第1区の遺構の発掘を行う。径が小さくて深い井戸が多いため、困難な作業が続く。そうした中、SE11から漆器や曲物が、SE8から井戸側の部材が出土した。発掘終了後、遺構の実測を行う。

9月11・12日 第1区の遺構および全景の写真撮影を行う。その後、造り方測量により発掘区の測量を行う。また、遺跡の範囲確認のためのトレンチ（第3区）を設定し発掘するが、遺構は存在しなかった。

9月13日 第2区の発掘にとりかかる。表土を重機で剥ぎ、その後遺構の発掘と実測を行う。

9月14日 第2区の写真撮影と測量を行う。

9月15日 機材の後片付け等の残余の作業を行い、発掘作業を完了する。

期間中不順な天候に悩まされたが、なんとか調査を順調に進めることができた。これは地元の調査に参加して下さった方々や大学生諸君、および関係者の方々の献身的な努力によるおかげであった。これらの方々に心から感謝の意を表します。



北より発掘区（第1区）を望む

（カット1）

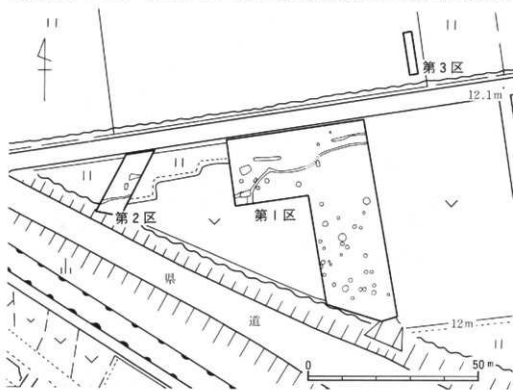
III 調査の概要

(1) 遺跡の概観と調査方法

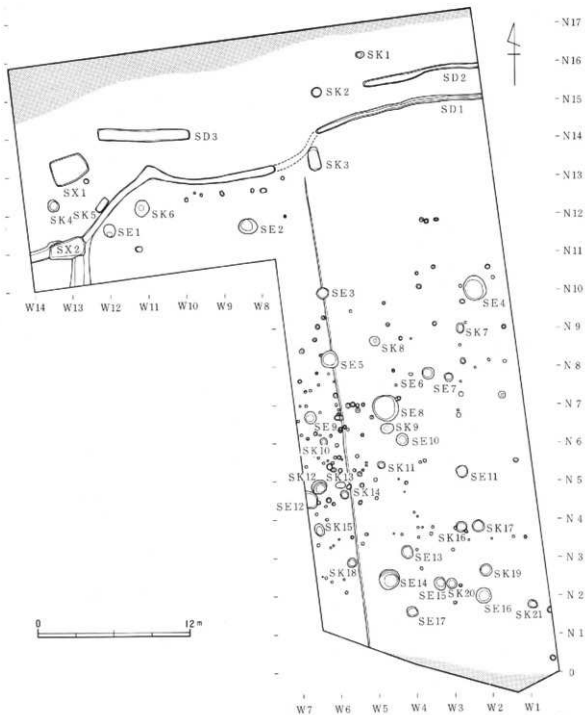
太屋敷遺跡は、東西に延びる標高12m前後、現水田面との比高差0.5～1mの自然堤防上に位置する。この自然堤防の南側には国道116号線、西側には県道長岡一寺泊線が走り、本来の地形は失われている。発掘区域は自然堤防の北側緩斜面で、遺跡全体の北西部分にあたる。遺跡の大部分は現在でも畑地となっている。

本遺跡は、以前より地元の方々によって土器が採集されその存在が知られていたが、昭和60年夏の町史編纂にともなう横滝山廃寺跡周辺遺跡分布調査において、再確認された遺跡である。分布調査では、遺物は自然堤防中央部から北側緩斜面にかけて、土師器や須恵器片が比較的多く散布し、灰釉陶器の埴底部片も採集された。

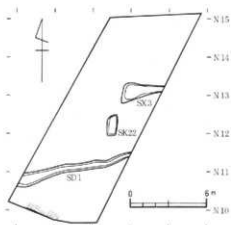
また、昭和61年には町教育委員会により、遺構の確認調査が実施された。調査地点は今回の調査区から東へ約20mの地点である。発掘は、自然堤防を横断するようにその最も高い部分から北側掘部にかけて、長さ53.5m、幅1.5mのトレンチを設定して行われた。検出された遺構には、溝・土坑・小穴があった。これらの遺構は自然堤防の高い部分に集中し、裾部



第2図 発掘調査区域



第3図 第1区遺構配置 (スクリーン・トーンは擾乱部)



第4図 第2区遺構配置(マフーン→は塚山)

付近ではあまりみられなかった。このことは今回の調査でも同様である。小穴は多数検出され建物跡となる可能性のものも存在したが、遺構は発掘しておらず、また幅1.5mのトレンチ内のことであったので明瞭には判断できなかった。しかし、遺構が密集することから、この付近が太屋敷遺跡の中心部ではないかと考えられた。遺物は土師器や須恵器片が約20点出土した。その中には、7世紀代までさかのぼる須恵器短頸壺があった(寺村光晴ほか『京田・太屋敷・日光畑遺跡発掘調査概報』寺治町教育委員会 1987)。

今回の発掘調査区域は、スーパーの駐車場となる部分(第1区)と、その西の乗り入れ道路となる部分(第2区)に分かれている。第1区は調査以前に削平されていたため、W5ラインの西側部分は地山が約30cm削られていた。調査区西境界壁の土層断面をみると、調査時の遺構検出面までとどいていない小穴も存在したようである。また、W5ラインの東側部分がかつて水田に利用されていたため、遺構検出面は本来の地山面より約50cm下がっている。一方、調査区域の南端は旱道造成のため擾乱を受けていた。同じく調査区域の北端も、農道造成と高圧電線の地下埋設工事、および耕地整理のため擾乱を受けていた。

検出した遺構には、井戸・土坑・小穴・溝・壑穴状遺構などがある。これらの遺構は、主に遺跡の立地する自然堤防の高い部分(第1区南域)に集中していた。第1区の地表面の標高は約12mであるが、南域の最も高い部分と北域の最も低い部分とでは約70cmの差がある。井戸は円形素掘りのものが中心であった。遺物は、珠洲焼・磁器・土師質土器や、漆器・曲物・箱物といった木製品などが出土した。また、井戸の堆積土層や遺物の出土状態などから、埋井の状況を復元することが可能である。土坑は、土師器や須恵器を出土するものと、珠洲焼を出土するものの二者があった。

ところで、本遺跡の北側は高さか80cmほど低くなっており、そこに水田が広がっている。現在水田と畑地との間には農道が東西に走り、両者を区画している。今回の開発行為では、この水田部分を土盛りし建物の敷地としていた。その部分は遺跡の範囲には含まれていなかったが、太屋敷遺跡の範囲と地山の状況を確認するために、トレンチ発掘を行った。建築工事はすでに始まっており、積んである資材や動きまわる重機の介間をぬうという制約があった。そのため第1区と農道を隔てた場所に、長さ12m幅2mのトレンチを1箇所だけ設定することが出来た(第3区)。土層は、スーパー敷地の約35cmにわたる盛土下に厚さ約30cmの水田耕作土があり、その下が地山となっていた。限られた狭い範囲のトレンチではあったが、遺構は存在しなかった。

発掘調査の方法は、第1区の東南隅調査区域外に基準杭を設け、そこから真北方向と真西方向に基線を設けた。なお、磁北方位は真北に対し西偏約7°10'である。この基線に基づいて、3×3mのグリッドを設定した。このグリッドは、アルファベットと数字の組み合わせによって呼ぶこととした。つまり、基準杭から北へN1、N2、N3・・・、西へW1、W2、W3・・・となる。また、3×3mの各グリッドの呼称は、その東南隅の交点をグリッド名とした。例えば、N3ラインとW4ラインの交点を東南隅に持つグリッドは、N3W4である。

(2) 遺 構

発掘された遺構には、第1区に井戸・土坑・小穴・溝・竪穴状遺構が、第2区に土坑・溝などがあつた。これらの遺構は、自然堤防の高い部分に密に存在していた。以下、井戸=SE、土坑=SK、溝=SD、その他の遺構= SXとして記していくこととする。

1) 井 戸

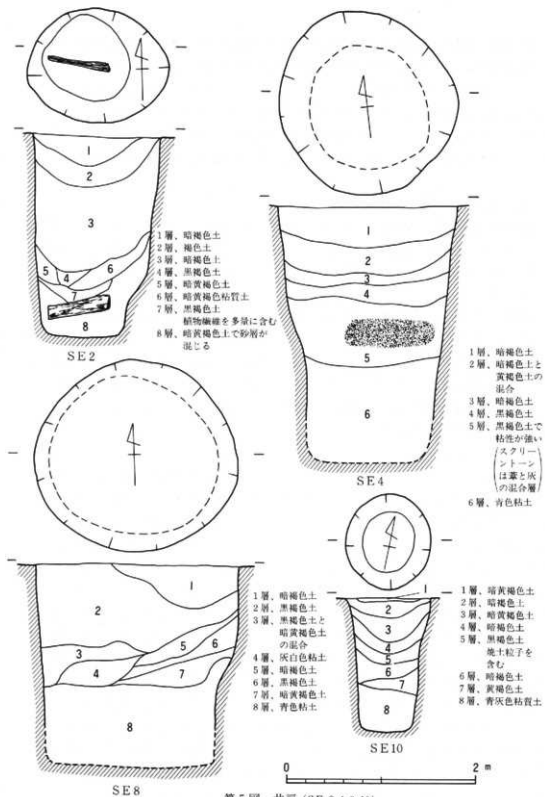
第1区のN12ラインより南側にのみ17基検出した。すなわち、自然堤防の裾部分には存在せず、高い部分にあつた。

SE1 (第3図) N11W11-12グリッドにおいて検出した円形素掘りの井戸で、上部径約90cm、底部径約40cm、深さ118cmである。断面は底部に至るにしたがい、南に寄って細くすばまる。底部は概ね平坦である。形態はSE10に似ている。土層は4層に分かれ、上から暗褐色土が互層をなして堆積していた。

遺物は出土しなかつた。

SE2 (第5図、図版第3-1) N11W8グリッドにおいて検出した。確認面では楕円形を呈し、底部では概ね円形を呈する井戸である。上部は長径150cm、短径120cm、底部径約85cmで、深さ212cmを測り、確認面から150cmで東壁にゆるやかな段を持ち、底部は平坦である。土層は8層で、底部から約45cm上部の付近に、植物繊維を多量に含む層(7層)が存在した。また、1・2層は堅くしまっていた。

遺物は、珠洲焼銅片2点、土師質土器片2点、鉄滓1点、礫1点が出土した。珠洲焼・かわらけ・礫は4～6層中、鉄滓は3層からの出土である。他に、井戸側(井戸の地下に設けられる井壁保護施設の名称は、本報告書では井戸側と呼称する。この施設を井筒や井戸枠との呼び方もあるが、広辞苑によると筒は円く細長い形に限定され、枠は細い木材で造った右糸・紙などを張る骨や輪郭の意味を持つものである。これに対し、側はまわりを包むものあるいは囲むものの意味があり、その機能や形態を考えた場合、井戸側が最も適切な名称と考えられる。)の部材と考えられる板材が1点、底面から約20cmの位置で出土した。部材らしきものはこの1点だけなので、井戸側が存在したかどうかは疑わしい。しかも出土した板材は断面が三角形であるので、部材とすれば井戸側上部の横板と思われる。したがって、井戸廃棄時に投棄されたか、あるいは埋置されたものである可能性が高いであろう。



第5図 井戸 (SE 2・4・8・10)

ところで、本井戸は掘鑿時に底部付近において埋設していた倒木にぶつかっている。そこで井戸の壁面に沿って、鋸状の金属工具で倒木を切断している。

SE3 (第3図) N9W6グリッドにおいて検出した円形素掘りの井戸で、上部径約90cm、底部径約80cm、深さ195cmである。断面は井戸中位下で若干膨らみ、底部は平坦であった。形態はSE2に似ている。土層は上から暗褐色土、黄褐色土、黒褐色土、青灰色粘質土の4層である。そのうち1層の暗褐色土と2層の黄褐色土は、強くしまっていた。

遺物は薄板材片が2点、3層の黒褐色土層中より出土した。

SE4 (第5図、図版第3-2) N9~10W2グリッドにおいて検出した、円形の井戸である。湧水のため完掘できなかったため、底部はボーリングによって確認した。上部径約190cm、深さ約270cmである。土層は6層に分かれ、ほぼ中位に黒褐色土の層(4・5層)があり、その中に葦(図版第7-14)と灰の混じったものが径約100cm、厚さ約30cmにわたって層をなしていた。また、上層は強くしまっていた。

遺物は黒褐色土層(4・5層)を中心に、珠洲焼壺胴部片1点、土師器甕片10点、曲物底板片1点、杓子の受部と思われる木製品片が1点出土した。

SE5 (第3図) N8W6グリッドにおいて検出した円形素掘りの井戸で、上部径約120cm、底部径約100cm、深さ118cmである。東側壁は底部から約30cm付近で段をなし、底部は概ね平坦であった。形態はSE13に似ている。土層は3層に分かれ、上から暗褐色土、黒褐色土、黄褐色土が堆積していた。

遺物は、土師質土器片15点と曲物片3点が、底部から約30cm上の、黒褐色土層下部から出土した。

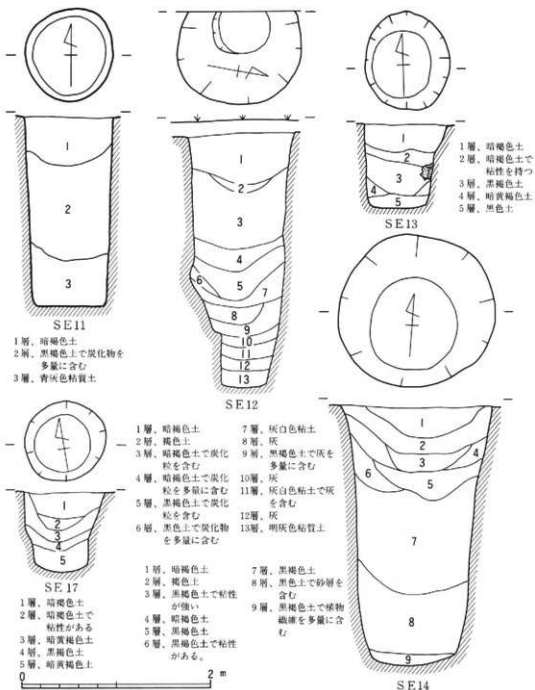
SE6 (第3図) N7W3グリッドにおいて検出した、円形素掘りの井戸である。上部径約100cm、底部径約65cm、深さ164cmを測り、形態はSE10に似ている。土層は上から黄褐色土(1層)、暗褐色土(2層)、灰が多量に混じる黒褐色土(3層)、青灰色粘質土(4層)に分かれる。1層と2層の上部は、強くしまっていた。

遺物は、木片1点と赤漆塊(図版第7-12・13)が3層中から出土した。

SE7 (第3図、図版第3-3) N7W3グリッドにおいて検出した、円形素掘りの井戸である。上部径約70cm、底部径約50cm、深さ132cmを測り、形態はSE10に似ている。土層は上から暗褐色土(1層)、灰が多量に混じる黒褐色土(2層)、青灰色粘質土(3層)に分かれる。1層は強くしまっており、2層は約70cmと厚く堆積していた。

遺物は出土しなかった。

SE8 (第5図) N6~7W4~5グリッドにおいて検出した、円形の井戸である。湧水のため完掘できず、底部はボーリングによって確認した。上部径約210cm、深さ約215cmである。土層は8層に分かれ、上層は強くしまっていた。3~7層は、土が四方から投げ込まれたように土層が入り乱れた状態であった。



第6図 井戸 (SE11・12・13・14・17)

遺物は、珠洲焼片3点、珠洲焼片口鉢片1点、青磁細片1点、土師質土器片11点、彫刻の施された木製品（組み合わせ式の鳥形の翼部分と思われる）1点、四角柱状木製品1点、井戸側部材と思われる板材17点、煤が付着した拳大の礫3点が出土した。これらの遺物のうち、部材は8層の青色粘土中からで、それ以外は全て3～7層中からの出土である。

部材は長方形の薄い板材であることから、板板を厚く重ねた井戸側であったことが推察される。

本井戸では、遺物の出土状態や土層の堆積状態から、井戸廃棄時の様子をよく窺うことができた。まず、周囲を青色粘土で固めてあった井戸側を取り除き、次に黒褐色土や暗褐色土などとともに、珠洲焼片や青磁片・土師質土器片・木製品・焼けた礫を投げ込んでいる。最後にさらに土を覆い全て埋めてから、陥没しないように上からつき固めるという順序が復元される。

SE9（第3図） N6W6グリッドにおいて検出した、円形素掘りの井戸である。上部径約95cm、底部径約65cm、深さ134cmを測り、底部は平坦で、壁は直線的に立ち上がる。形態はSE10に似ている。土層は上から黄褐色土、ロームブロックを含む暗褐色土、暗褐色土の3層に分かれる。

遺物は、土師質土器細片11点と礫1点が出土した。

SE10（第5図、図版第3-4） N5～6W4グリッドにおいて検出した、円形素掘りの井戸である。上部径約95cm、底部径約55cm、深さ142cmを測り、底部は概ね平坦で、壁は直線的に立ち上がる。土層は8層に分かれ、上部の1～3層は堅くしまっており、井戸のほぼ中程には焼土粒子を含む黒褐色土層（5層）があった。

遺物は、珠洲焼片口鉢片1点、土師質土器片1点、桜樹皮1点、木片7点、煤の付着した磨石1点、焼けた礫1点が出土した。遺物は5層の焼土粒子を含む黒褐色土層を中心に、4～6層中からの出土である。

SE11（第6図、図版第3-5） N5W2グリッドにおいて検出した、円形素掘りの井戸である。上部径約95cm、底部径約90cm、深さ198cmを測り、底部は平坦で、壁は直線的に立ち上がる。土層は上から暗褐色土（1層）、炭化物和灰を多量に含む黒褐色土（2層）、青灰色粘質土（3層）の3層に大別される。堆積土の厚さは、1層約50cm、2層約100cm、3層約30cmを測り、2層が極めて厚く、1層は堅くしまっていた。

遺物は、土師質土器片2点、漆器皿1点、曲物片21点、箱物片1点、絵描板状木製品1点、箸状木製品1点、棒状木製品片（柄杓か）10点、四角柱状木製品片1点、不明木片2点、小枝片3点が出土した。いずれも2層の黒褐色土層下部からの出土である。

SE12（第6図、図版第3-6） N4W6グリッドにおいて検出した、円形の井戸である。西側の一部が調査区域外にかかるため、完掘できなかった。上部径約130cm、底部径約65cm、深さ267cmを測り、底部は平坦で、底部から55cm上の南側壁に段を持っている。土層は13

層に分かれる。3層から6層までの厚さ約130cmにわたって炭化物が含まれており、特に4～6層はその量が著しかった。また、その下に灰白色粘質土層と灰層が互層をなしていた(7～12層)。1層は堅くしまっていた。

遺物は、珠洲焼壺胴部片6点、土師質土器片2点、表面が炭化した杭8点が出土した。これらの遺物のうち、杭は最下層(13層)の明灰色粘質土層からで、他は7～12層中からの出土である。

また、本井戸もSE2と同様に底部付近で埋没倒木に接しており、鉤状の金属工具で切断しているのが観察された。

SE13(第6図) N3W4グリッドにおいて検出した、円形素掘りの井戸である。上部径約100cm、底部径約70cm、深さ88cmを測り、底部は平坦で、壁はほぼ直線的に立ち上がる。土層は上から暗褐色土(1層)、粘性を持つ暗褐色土(2層)、黒褐色土(3層)、暗黄褐色土(4層)、黒色土(5層)に分かれる。1層は堅くしまっていた。

遺物は、3層の黒褐色土層を中心に、20cm大の焼けた礫が4点出土した。

SE14(第6図) N2W4グリッドにおいて検出した円形の井戸で、上部径約160cm、底部径約90cm、深さ270cmである。底部は若干丸みを帯び、壁はほぼ直線的に立ち上がる。下部からは湧水があった。土層は9層に分かれる。井戸中位には黒褐色土の層があり(3・5～7層)、最下部の9層は植物繊維を多量に含んでいた。また、1・2層は堅くしまっていた。

遺物は、珠洲焼壺胴部片2点、白磁皿片1点、土師質土器片2点、木片1点、15cm大の焼けた礫2点が出土した。いずれも7層からの出土である。

SE15(第3図) N2W3グリッドにおいて検出した、円形素掘りの井戸である。上部径約90cm、底部径約65cm、深さ138cmを測り、底部はほぼ平坦で、壁は直線的に立ち上がる。形態はSE10に似ている。土層は上から暗褐色土、黄褐色土、黒褐色土、青色粘土の4層に分かれる。上層は堅くしまっていた。

遺物は、木片が2点出土した。

SE16(第3図) N1W2グリッドにおいて検出した、円形素掘りの井戸である。上部径約115cm、底部径約100cm、深さ100cmを測り、底部はほぼ平坦で、壁は直線的に立ち上がる。形態はSE13に似ている。土層は上から暗褐色土(1層)、黄褐色土(2層)、黒褐色土(3層)、ロームブロックを含む暗褐色土(4層)に分かれる。1層は堅くしまっていた。

遺物は3層の黒褐色土層中から、珠洲焼片口鉢片1点、板材片2点、煤の付着した磨石1点が出土した。

SE17(第6図) N1W4グリッドにおいて検出した円形素掘りの井戸で、上部径約88cm、底部径約60cm、深さ83cmである。底部は若干丸みを帯び、壁は崩落のためか所々段を有する。土層は上から暗褐色土、粘性のある暗褐色土、暗黄褐色土、黒褐色土、暗黄褐色土の5層に分かれる。上層は堅くしまっていた。

遺物は、土師質土器片が3点出土した。

2) 土 坑

第1区で21基、第2区で1基検出した。平面形は円形のもの为主であるが、長方形を呈するものも3基存在した。土坑は調査区域全域にみられるが、やはり他の遺構と同様、自然堤防の高い部分を中心に分布している。

SK1 (第3図) N16W5グリッドにおいて検出した楕円形の浅い皿状の土坑で、上部長径67cm、短径48cm、底部長径42cm、短径33cm、深さ22cmである。土層は暗褐色土の1層のみであった。

遺物は出土しなかった。

SK2 (第3図) N15W6グリッドにおいて検出した、円形の土坑である。上部径約75cm、底部径約68cm、深さ23cmを測り、底部は平坦である。土層は暗褐色土の1層のみであった。

遺物は出土しなかった。

SK3 (第3図) N13W6グリッドにおいて検出した、ほぼ南北に主軸をとる長方形の浅い土坑である。上部は長軸185cm、短軸88cm、底部は長軸151cm、短軸80cm、深さ8cmである。土層は黒褐色土の1層のみであった。

遺物は、珠洲焼腹胴部片が1点出土した。

SK4 (第7図) N12W13グリッドにおいて検出した、ほぼ円形を呈する土坑である。上部径約96cm、底部径約60cm、深さ38cmを測り、断面はU字形を呈する。土層は上から暗褐色土、黄褐色土、暗褐色土の3層に分かれる。

遺物は出土しなかった。

SK5 (第7図) N12W12グリッドにおいて検出した、長方形の土坑である。上部は長軸123cm、短軸55cm、底部は長軸116cm、短軸47cm、深さ35cmである。土層は3層に分かれ、下層になるにしたがい粘性が強くなる。

遺物は出土しなかった。

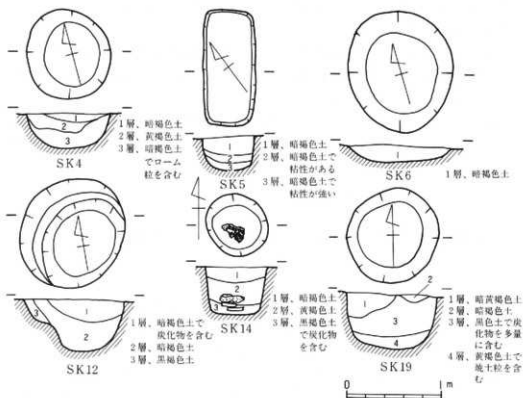
SK6 (第7図) N12W11グリッドにおいて検出した、ほぼ円形を呈する浅い皿状の土坑である。上部径約128cm、底部径約86cm、深さ18cmを測り、土層は暗褐色土の1層のみであった。

遺物は、土師器片が1点出土した。

SK7 (第3図) N8~9W2グリッドにおいて検出した、楕円形の土坑である。上部は長軸80cm、短軸58cm、底部は長軸63cm、短軸44cm、深さ25cmを測り、断面はU字形を呈する。土層は上から暗褐色土、黄褐色土の2層に分かれる。

遺物は、土師器坏1点、土師器皿1点が出土した。

SK8 (第3図) N8W5グリッドにおいて検出した、円形の土坑である。上部径約90



第7図 土坑 (SK4・5・6・12・14・19)

cm、底部径約25cm、深さ32cmを測り、断面はすり鉢状を呈する。土層は焼土粒子と炭化粒子を含む黒褐色土層のみであった。

遺物は、土師器片が5点出土した。

SK9 (第3図) N6W4グリッドにおいて検出した、円形の土坑である。上部径約100cm、底部径約40cm、深さ72cmを測り、断面はU字形を呈する。土層は上から暗褐色土、黄褐色土、炭化物を含む黒褐色土の3層に分かれる。

遺物は、土師器環2点、土師器残片8点、須恵器長頸壺頸部片2点、須恵器甕胴部片2点が出土した。

SK10 (第3図) N6W6グリッドにおいて検出した、円形の土坑である。上部径約65cm、底部径約40cm、深さ50cmを測り、底部は概ね平坦で、断面は逆台形を呈する。土層は上から暗褐色土、黄褐色土の2層に分かれる。

遺物は出土しなかった。

SK11 (第3図) N5W4グリッドにおいて検出した、円形の浅い皿状の土坑である。上部径約60cm、深さ13cmを測り、土層は暗褐色土層のみであった。

遺物は出土しなかった。

SK12(第7図) N4W6グリッドにおいて検出した円形の土坑で、上部径約110cm、底部径約65cm、深さ55cmである。検出面から23cmの深さで一部に段を有する。土層は上から炭化物を含む暗褐色土、暗褐色土、黒褐色土の3層に分かれる。

遺物は、須恵器甕胴部片1点、土師器片4点、鉄滓1点が出土した。

SK13(第3図) N4W5～6グリッドにおいて検出した、楕円形の土坑である。上部は長軸80cm、短軸45cm、底部は長軸62cm、短軸34cm、深さ38cmを測り、断面は逆台形を呈する。土層は上から暗褐色土、黄褐色土の2層に分かれる。

遺物は出土しなかった。

SK14(第7図、図版4-1・2) N4W5グリッドにおいて検出した、円形の土坑である。上部径約65cm、底部径約50cm、深さ50cmを測り、底部は平坦で、壁は直線的に立ち上がる。土層は上から暗褐色土、黄褐色土、炭化物を含む黒褐色土の3層に分かれる。

遺物は、土坑のほぼ中程の深さから礫が2点出土し、その下に潰されたような状態で珠洲焼片口鉢片が3点出土した。片口鉢はいずれも別個体であった。

SK15(第3図) N3W6グリッドにおいて検出した、円形の土坑である。上部径約90cm、底部径約70cm、深さ50cmを測り、断面はU字形を呈する。土層は上から暗褐色土、ロームブロックを含む暗褐色土、黄褐色土の3層に分かれる。

遺物は、土師器片3点、須恵器坏片1点が出土した。

SK16(第3図) N3W2グリッドにおいて検出した、ほぼ円形を呈する土坑である。上部径約90cm、底部径約75cm、深さ52cmを測り、底部は概ね平坦で、壁は直線的に立ち上がる。土層は上から暗褐色土、黄褐色土、粘性を持つ暗褐色土の3層に分かれる。

遺物は、土師器片1点、須恵器壺片1点、砥石1点が出土した。

SK17(第3図) N3W2グリッドにおいて検出した、円形の土坑である。上部径約95cm、底部径約75cm、深さ64cmを測り、断面はU字形を呈する。土層は上から暗褐色土、黄褐色土、暗褐色粘質土の3層に分かれる。

遺物は、拳大の礫が2点出土した。

SK18(第3図) N2W5グリッドにおいて検出した、円形の土坑である。上部径約75cm、底部径約65cm、深さ24cmを測り、断面はU字形を呈する。土層は上から暗褐色土、炭化物を含む暗褐色土の2層に分かれる。また、底部と壁の下部が若干乾燥していた。

遺物は、土師質土器片1点、煤の付着した磨石1点、約15cm大の煤の付着した礫2点が出土した。

SK19(第7図) N2W1～2グリッドにおいて検出した円形の土坑で、上部径約100cm、底部径約70cm、深さ55cmである。断面はU字形を呈し、土層は4層に分かれる。3層は炭化物を多量に含む黒褐色土層である。最下層の4層は焼土粒子を含む黄褐色土層で、若干生焼けのような状態であった。

遺物は、煤の付着した磨石が1点出土した。

SK20(第3図) N2W3グリッドにおいて検出した、円形の土坑である。上部径約80cm、底部径約50cm、深さ54cmを測り、断面は逆台形を呈する。土層は上から暗褐色土、黄褐色土の2層に分かれる。

遺物は出土しなかった。

SK21(第3図) N1W1グリッドにおいて検出した、円形の土坑である。上部径約70cm、底部径約55cm、深さ46cmを測り、断面はU字形を呈する。土層は上から黒褐色土、黄褐色粘質土、暗褐色土の3層に分かれる。

遺物は、土師器片が1点出土した。

SK22(第4図) 第2区のN11-12W23グリッドにおいて検出した、ほぼ南北に主軸をとる長方形の浅い土坑である。上部は長軸163cm、短軸82cm、底部は長軸140cm、短軸58cm、深さ16cmである。底部は概ね平坦で、上層は暗褐色土層のみであった。

遺物は出土しなかった。

3) 小 穴

ここでは、径が50cm以下のものを小穴として扱う。小穴は全部で153個検出されたが、第2区には存在しなかった。深さは最も深いもので約40cmを測るが、全体的には比較的浅いものが多かった。いずれも、ほぼ垂直に掘り込まれていた。遺物を伴出したものは、N4W5グリッドで珠洲焼甕片を出土した1箇所だけであった。

小穴の分布は、標高の高いN3-8W4-6グリッドにおいて密であった。その中で企圖性を持って並び、建物の柱穴と推定されるものは存在しなかった。しかし、調査時にはW5ラインの西側部分はすでに地山が約30cm削られており、W5ラインの東側部分は水田耕作のため本来の地山面より約50cm下がっていた。調査区境界西壁の土層断面には、調査時の遺構検出面にまで達していない小穴も幾つかみられるので、建物の柱穴が存在した可能性は必ずしも否定できないと思われる。

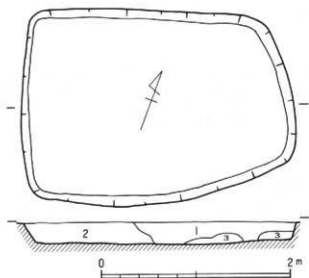
4) 溝

自然堤防の裾部を東西に走る2条の溝と、溝状の遺構を1基検出した。

SD1(第3・4図) 第1区の北側を東西に横切る溝である。N11W12グリッド付近で2本に分かれるが、第2区においてその延長が検出されている。本遺跡の位置する自然堤防北側緩斜面の、端に沿って延びているようである。幅は35-45cmで、深さはN10W12グリッド付近で30cmと最も深く、N12W7グリッド付近では確認面上にわずかに痕跡を残すだけであった。溝の断面は浅いU字形で、土層は暗褐色土層のみである。

遺物は、土師器片3点、須恵器甕胴部片6点、棒状の鉄器1点が出土した。

SD2(第3図) N15W2-5グリッドにおいて検出した、東西に延びる浅い溝である。幅は確認面で約65cm、深さは溝の東端で15cmを測り、西に行くにつれて浅くなる。溝はN15



第8図 竪穴状遺構 (SX1)

1層、暗褐色土 2層、黄褐色土 3層、ロームブロック

色土層のみであった。

遺物は出土しなかった。

5) その他の遺構

第1区において2基の竪穴状遺構と、第2区において不定形の遺構を1基検出した。

SX1 (第8図、図版第4-3) N12~13W12~13グリッドにおいて検出した、不整形な方形を呈する竪穴状遺構である。上部は長軸2.91m、短軸2.04m、底部は長軸2.73m、短軸1.85m、深さ0.27mを測り、底部は平坦で、壁は直線的に立ち上がる。土層は基本的に2層が堆積している。竪穴東側は暗褐色土で、西側は黄褐色土であった。

遺物は土師質土器皿片が1点、底面から出土した。

SX2 (第3図) N11W12~13グリッドにおいて検出した、矩形の竪穴状遺構である。SD1を切って掘られており、上部は長軸2.78m、短軸長辺1.6m、短軸短辺1.1m、底部は長軸2.63m、短軸長辺1.32m、短軸短辺0.8m、深さ0.3mである。底部は概ね平坦で、壁は直線的に立ち上がる。土層はロームブロックを含む暗褐色土層のみであった。

遺物は、土師質土器片が1点出土した。

SX3 (第4図) 第2区N12~13W22~23グリッドにおいて検出した、不定形の遺構である。調査区外の東にまだ延びるもので、幅は広い部分で1.5m、狭い部分で0.5m、深さは約0.12mを測り、底部は若干の凹凸がある。

遺物は出土しなかった

W5グリッドで浅く立ち上がって途切れるが、本来はまだ西に延びていたものと思われる。土層は暗褐色土層のみであった。

遺物は出土しなかった。しかし、堆積土から判断すると、SD1と同時期の溝であると推察される。

SD3 (第3図) N14W9~12グリッドにおいて検出した溝状の遺構である。上部は長さ7.25m、幅0.92m、底部は長さ7.18m、幅0.74m、深さ0.2mを測り、底部は概ね平坦で、断面は逆台形を呈する。土層は黒褐色土層のみであった。

IV 出土の遺物

太屋敷遺跡から出土した土器や陶磁器類には、土師器、須恵器、珠洲焼、白磁、青磁、土師質土器があった。また、木製品には漆器、曲物、箱物、杓子、彫刻の施された木製品、箸状木製品、井戸側材などがある。他に、石器や鉄関係遺物が若干出土した。

(1) 平安時代の土器

土師器と須恵器がある。遺構にともなうものは、土坑と溝からの出土が主であった。

1) 土師器 (第9図1～6、図版第5-1～4)

器種は坏、皿、甕がある。

1、2は坏で、1は口径13cm、底径4.5cm、器高5cmである。底部は左回転の糸切りで、体部は薄く内湾気味に立ち上がり、水挽き痕を残している。SK21から出土した。2は口径12.6cm、底径5cm、器高4.5cmである。明瞭な水挽き痕を残す体部は内湾して立ち上がり、口縁部で若干外方に折れる。SK9から出土した。

3・4は皿である。3は底径5cmを測り、底部には回転糸切り痕が残っている。SK7から出土した。4は底径5.2cmを測り、器面調整は摩耗のため不明である。SK9から出土した。

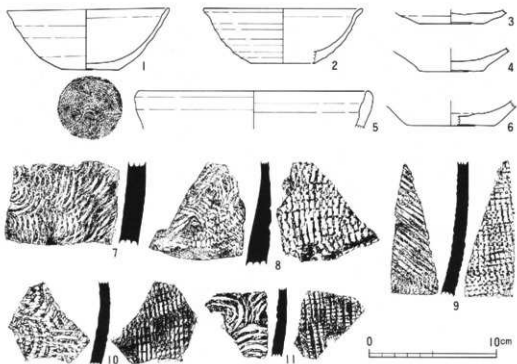
5、6は甕である。5は口径18.8cmを測り、口縁部内側が肥厚し、端部に向かって若干内湾する。明褐色を呈し、焼成は不良である。SE4から出土した。6は底径7.8cmを測り、底部は回転糸切りである。明褐色を呈し、胎土には雲母を含んでいる。SE4から出土した。

2) 須恵器 (第9図7～11、図版第5-5～9)

器種は坏、甕、長頸壺などがある。図示できるものは甕だけであった。

7～11は甕胴部である。7は外面に横位の叩きの後それをナデ消しており、内面には連弧文のあて具痕がみられる。SK12から出土した。8は外面に格子目文の叩きを施し、内面には格子目文と同心円文のあて具痕がみられる。SD1から出土した。9は外面に格子目文の叩きを施し、内面には上部に斜位、下部に縦位の平行文のあて具痕がみられる。SD1から出土した。10は外面に格子目文の叩きを施し、内面には連弧文と平行文のあて具痕がみられる。SD1から出土した。11は外面に格子目文の叩きを施し、内面には同心円文のあて具痕がみられる。第2区の覆土中から出土した。

以上の土師器と須恵器の年代を觀察すると、1・2の土師器坏は底部が回転糸切りで、体部は若干丸みを持ち、水挽き痕が比較的明瞭に残っている。こういった特徴を持つ土師器坏は、聖竜町山三賀Ⅱ遺跡において分類されている土師器柄B類にあたり、9世紀第3四半期に比定されるⅣ2期には確実に一定量存在すると指摘されている(板井秀弥ほか『山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会 1989)。本遺跡出土のものは水挽き痕が明瞭に残ることから、その



第9図 出土土師器・須恵器

初期段階に位置付けられよう。同様の土師器坏は、周辺の遺跡では横滝山廃寺跡や京田遺跡においても出土している。

一方、土師器甕は口縁部が肥厚し断面が丸味をおびている。坏と較べてかなり後出的な様相を持つものであるが、平安時代の範疇の中でとらえられよう。須恵器甕も概ね同期に比定される。

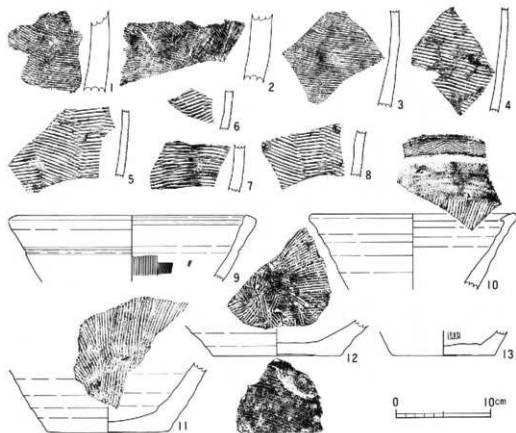
(2) 中世の陶磁器類

出土したのものには珠洲焼、白磁、青磁、土師質土器がある。主に井戸と土坑から検出された。土師質土器は細片のみで図示できなかった。

1) 珠洲焼 (第10図、図版5-10-19)

器種は甕、壺、片口鉢がある。

1-3は甕胴部と思われる。1は器壁が約2.2cmと厚く、外面は条線の比較的細かい叩き目で、内面は押圧痕がみられる。暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。N4W5グリッドの小穴から出土した。2も器壁が約2.3cmと厚く、外面は条線の細かい叩き目で、一部をナデ消している。胎土には白色砂粒を含み、暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。SE16から出土した。3は外面が条線の比較的太い叩き目で、内面は押圧痕がみられる。胎土には白色砂粒を含んでいる。暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。SE2から出土した。



第10図 出土珠洲焼

4～8は壺胴部と思われる。図示できなかつたものも含めて、壺は叩き成形のものばかりであった。4は外面が条線の太い叩き目で、内面には押圧痕がみられる。灰白色を呈し、焼成は堅緻である。SE12から出土した。5は、外面に条線の比較的太い綾杉状の叩き目が認められる。暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。SE12から出土した。6は、外面に条線の太い綾杉状の叩き目が認められる。暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。SE4から出土した。7は外面が条線の比較的細かい叩き目で、内面には押圧痕がみられる。灰白色を呈し、焼成は堅緻である。SE12から出土した。8は外面が綾杉状の叩き目で、条線は比較的太く、内面には押圧痕がみられる。暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。SE12から出土した。

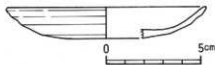
9～13は片口鉢で、9は口径26.3cmである。体部は若干内湾気味に開き、口縁部は丸みを持つが端部は外傾する面を持つ。体部外面には口縁下3cmの部分に二条の沈線がめぐり、口縁部内側は若干窪んで沈線状になっている。叩き目は比較的粗く、幅2.7cm、11本が1単位で、内面全体に施されていたものと推測される。胎土には小石を若干含んでいる。灰色を呈し、焼成は堅緻である。SE14から出土した。10は口径22cmを測り、水挽き痕を明瞭に残す体部

は直線的にひろがる。口縁部は内傾して内側に突出した面を有し、そこには櫛目波状文がめぐる。内面の押し目は櫛目波状文と同一工具を使用しており、内面全体に施されていたものと推測される。胎土には小石を若干含んでいる。暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。SK14から出土した。

11は底径12.8cmを測り、底部は静止糸切りで、体部は直線的に立ち上がる。内外面ともに水挽き痕が明瞭にみられる。内面には全体に押し目が施されていたものと推測される。胎土には小石を含み、灰色を呈し、焼成は堅緻である。SK14から出土した。12は底径13.6cmを測り、底部は静止糸切りで、体部には水挽き痕が比較的明瞭にみられる。押し目は内面全体に施されている。胎土には小石を若干含み、暗黒灰色を呈し、焼成は堅緻である。SE8から出土した。13は底径11cmを測り、底部は静止糸切りで、内面の体部と底部の境に沈線がめぐる。押し目は深くしっかりしたものがわずかに残っている。灰色を呈し、焼成は堅緻である。SE10から出土した。

2) 磁 器 (第11図、図版第5-20)

器種は白磁と青磁が各1点ある。青磁はSE8から出土したが、細片のため図示できなかった。



第11図 出土白磁

図示したものは白磁の皿である。口径10.6cm、底径4.1cm、器高1.6cmを測り、器壁は薄い。体部は水挽き整形で、外面の体部下半は二段のへう削りによって仕上げられている。SE14から出土した。

以上の中世遺物の時期について、珠洲焼の年代

観をもとに考えてみたい。新潟県では北部の世神丘陵周辺に、13世紀前半頃の背中夾窯をはじめとする珠洲焼系の在地窯が知られている。そのため本遺跡出土のものも一概に珠洲焼とはいえない。しかし、出雲崎町番場遺跡では、出土した13世紀から15世紀前半までのものを胎土分析した結果、すべて珠洲焼であった。そうしたことから、背中夾窯などの在地窯の製品は県北部の阿賀北地方を中心に流通し、それ以外の地域で出土するものは基本的に珠洲焼とみてよいであろうと指摘されている(坂井秀弥・金沢道篤ほか『三島郡出雲崎町番場遺跡』新潟県教育委員会 1987)。したがって本遺跡出土のものも珠洲焼としておく。

珠洲焼はⅠ～Ⅶ期の編年区分が明らかにされている(吉岡康暢『中世陶器の生産と流通』『考古学研究』108号 1981ほか)。壺5・6・8は綾杉状の叩き目を持つもので、Ⅳ期に含められるものと思われる。一方、片口鉢11の口縁先端部に施された櫛目波状文は、Ⅴ期に特徴的にみられるものである。他の片口鉢も内面の押し目が密に施されていることから、同期に含められるものであろう。吉岡編年での実年代は、Ⅳ期が14世紀、Ⅴ期が15世紀前半に比定されている。ゆえに本遺跡の中世遺物も、この時期の幅としてとらえたい。

(3) 木製品 (第12・13図、図版6・7-1~9)

出土した木製品には漆器、曲物、箱物、杓子、絵描板状木製品、彫刻の施された木製品、箸状木製品、井戸側部材などがある。いずれも井戸から出土した。

1は漆塗りの台付皿である。口径13.2cm、底径9.2cm、器高2.5cmを測り、体部は内湾しながら立ち上がり、口唇部は丸くおさまる。高台はやや外方に広がる形で、使用のため端部の摩耗が著しい。口唇部および底部外面と高台部には黒漆が、それ以外には赤漆が塗られている。SE11から出土した。

2~22は曲物である。2がSE4から、3~22はSE11から出土した。2・3は曲物底板で、椀目板を使用している。2は残存長18.3cm、残存幅3.9cm、厚さ0.4cmを測り、はめ込み式の底板と考えられる。両面および周縁とも丁寧に整形しているが、若干反り気味である。周縁部には法がつけられている。全面に煤が付着していた。3は残存長21.6cm、残存幅8.2cm、厚さ0.75cmを測り、曲物推定径は24cmである。両面および周縁とも丁寧に整形している。周縁部には若干法をつけ、木目の方向を避けて径3.5cm、深さ約1cmの釘穴を2孔穿っている。全面に煤が付着していた。

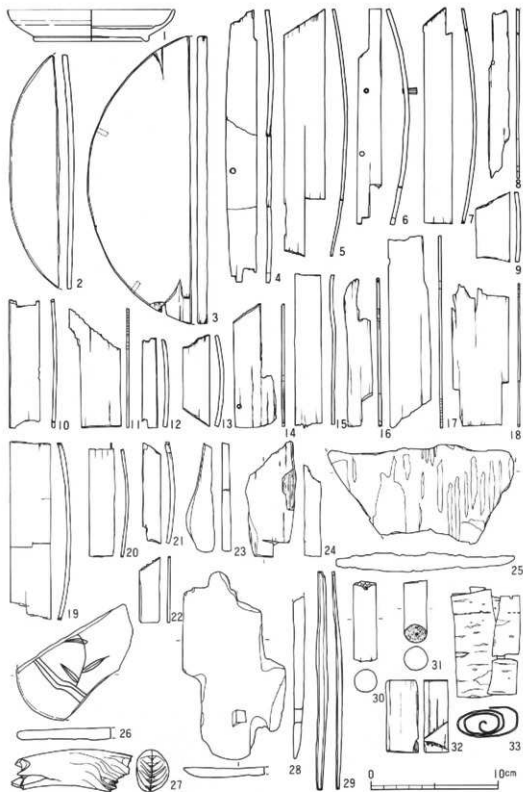
4~22は曲物側板と考えられるものであるが、湾曲していた形跡が認めにくいものもあるので、箱物か折敷の可能性を有するものもある。いずれも椀目を使用している。厚さは0.15cm~0.2cmを測るもの(5・7・8・10・11・14・16~18・20・22)と、約0.3cmを測るもの(4・6・9・12・13・15・19・21)の二タイプがある。4・6・14には釘穴が穿たれていた。4の釘穴は径0.4cmを測る。6には径0.35cmの釘穴が2孔あり、一方には木釘が残っていた。木釘は残存長1.1cm、先端部径0.4cmを測り、側面は面取りがなされ、断面八角形を呈する。14の釘穴は径0.3cmを測り、片面にはつや出しのための塗りがみられる。同様に片面に塗りが施されているものには、16と17があった。また、4・6・9・13・19・21には全面に煤が付着していた。

23・24は板状木製品である。23は厚さ約0.7cm、24は厚さ約1.4cmを測り、両者とも用途は不明である。ともにSE11から出土した。

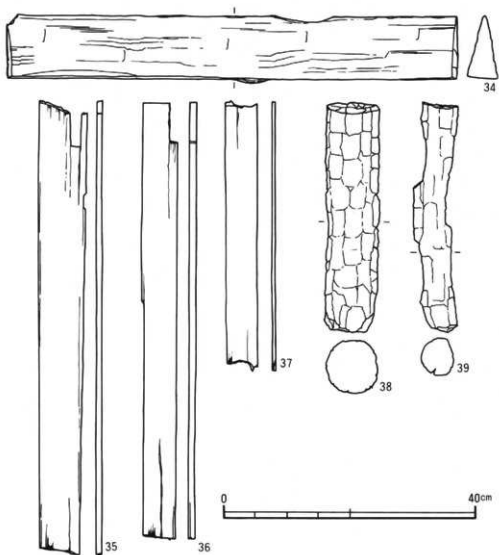
25は杓子の受部と思われる。残存最大径14.6cm、厚さ約1.4cmを測り、かなり大形の杓子である。腐食が著しいが、側面には若干下法を有する。SE4から出土した。

26は絵が描かれた板状木製品である。残存幅10.8cm、厚さ約1.9cmを測り、板は椀目を使用し、両面および周縁とも丁寧に整形している。周縁部には法がつけられている。残存する周縁から推定すると、楕円形をなすものと思われる。絵は植物を中心に描かれているようで、線刻した後墨を流し込んで仕上げている。SE11から出土した。

27は箱物の側板で、残存長14.7cm、残存幅8.1cm、厚さ約0.7cmである。縦じる時に組み合わせる板との隙間ができないように、側縁には片面に法がつけられている。穴は一辺約0.8cmの歪んだ方形で、縦じやすいように側縁に向かって断面が平行四辺形を呈している。SE



第12図 出土木製品(1)

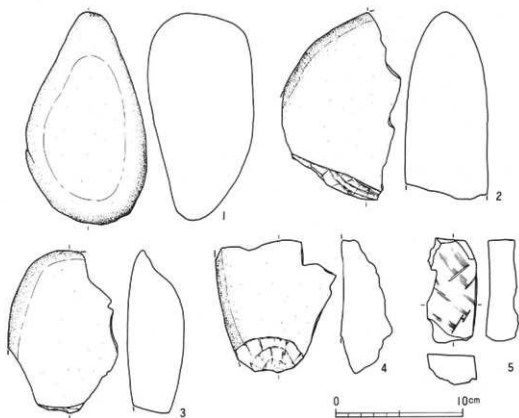


第13図 出土木製品(2)

11から出土した。

28は彫刻の施された木製品である。残存長9.5cm、幅約3cm、厚さ約2.5cmを測り、断面は楕円形を呈する。彫刻が施された部分は、鳥の翼の先端部分のように見える。彫刻がなされているのは反対側の先端は、細くすばまってソケット状になっている。表面は彫刻の後に丁寧に磨いて仕上げられている。推測の域を出ないが、組み合わせ式の鳥形木製品の翼部分ではないかと思われる。SE8から出土した。

29は箸状木製品である。長さは17.2cmで、板材を縦割りにして角棒を作り、側面を粗く削り丸みをもたせている。断面は不整な六角形を呈する。SE11から出土した。



第14図 出土石器

30・31は棒状の木製品片である。断面は径1.8cmの円形で、表面は丁寧に磨いて仕上げられている。両者ともSE11からの出土で、同様の小片が8点出土しており、径がほぼ同一であることから本来は1本のものであろう。柄杓の柄の一部かとも思われるが、明瞭には判断できない。

32は四角柱状の木製品片である。残存長5.7cm、断面2.5cm×1.9cmを測り、表面には鑿による加工痕が認められる。SE8から出土した。

33は桜樹皮である。本来は細長く切って、曲物などの板材を覆じる紐に使用するつもりのものであろう。SE10から出土した。

34～37は井戸側の部材と思われるものである。34は長さ71.4cm、幅10cm、厚さ4.8cmを測り、断面は二等辺三角形を呈する。表面は幅1.5cmの鑿によって削られており、一部が焼けて炭化している。横板組井戸側の最上部の部材と思われる。SE2から出土した。35～37は薄い板材で、いずれもSE8から出土した。35は残存長72cm、残存幅7.5cm、厚さ0.8cm、36は残存長69cm、残存幅7.5cm、厚さ0.9cm、37は残存長43cm、残存幅5cm、厚さ0.5cmである。柱目を使用しており、表面は丁寧に整形されている。縦板を厚く重ねた井戸側の部材であろう。

38・39は断面円形の杭である。図示できなかったが先細りとなる先端部とみられる断片が

あることから、杭と判明した。38は残存長36.3cm、径8.3cm、39は残存長36.6cm、径5.7cmである。いずれも表面は焼けて炭化しており、SE12から出土した。

(4) 石 器 (第14図、図版第7-15~18)

出土した石器には磨石と砥石がある。

1~4は磨石で、石材は安山岩である。1は長さ15.6cm、幅9.5cm、厚さ8.2cmを測り、磨面はほぼ全面で、長軸の両端には敲打痕が認められる。全体に煤が付着している。SE10から出土した。2は残存長14.6cm、残存幅9.2cm、厚さ6.4cmである。磨面は全面にあり、ほぼ全体に煤が付着している。SE16から出土した。3は残存長12.7cm、残存幅8.6cm、厚さ4.4cmである。磨面は片面のみで、一部に煤が付着している。SK18から出土した。4は残存長10.3cm、残存幅9.4cm、厚さ4cmである。磨面は片面のみで、全体に煤が付着している。SK19から出土した。

5は砥石で、石材は凝灰岩である。長さ7.9cm、幅4cm、厚さ2.3cmを測り、砥ぎ面は4面である。N13W4グリッド覆土中から出土した。

(5) 鉄関係遺物 (図版第7-10・11)

出土した鉄関係の遺物には、棒状の鉄器と鉄滓がある。

棒状の鉄器は残存長6cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測り、断面は楕円形を呈する。用途は不明で、SD1から出土した。

鉄滓は約2.5cm大で、重量は13gである。分析は行っていないが、鍛錬鍛冶滓と観察されるもので、SE2から出土した。



SE2の発掘

(カット2)

V ま と め

今回の太屋敷遺跡の発掘調査では、中世（14世紀から15世紀前半）の井戸17基、平安時代および中世の土坑22基と小穴群、平安時代の溝などを検出した。ここでは井戸の検討を中心として、太屋敷遺跡の性格について考えてみたい。

井戸の規模 新潟県内の井戸は古墳時代が素掘りで、奈良・平安時代になると木製井戸側が加わり、中世ではさらに石組井戸側が出現するとの指摘がなされている（註1）。本遺跡では円形素掘りの井戸が中心であった。検出された井戸は土層断面の観察から、崩落によって形状が大きく変化したものはなかった。

井戸は規模によって次の3タイプに分けることができる。

- A 類……確認面での上部径が130cm以上で、深さが210cm以上のもの（SE4・8・12・14）。
- B 類……確認面での上部径が90～120cmで、深さが190～210cmのもの（SE2・3・11）。
- C 類……確認面での上部径が70～120cmで、深さが80～170cmのもの（SE1・5・6・7・9・10・13・15～17）。

A類は規模の大きい一群である。このうちSE8では部材が残存していたので、井戸側であったことがわかる。SE12では最下層の明灰色粘質土中から、表面が炭化した杭が出土した。縦板組方形井戸側の周囲を杭で固定している例があるので（註2）、SD12出土の杭も井戸側固定用の杭の一部である可能性が強いと思われる。表面が炭化しているのは、水による腐食を防ぐためのものであろう。すなわち、SE12にも井戸側であったことが推測される。他方、同じA類のSE4とSE14は、湧水のため底面まで完掘できなかった。そのため井戸側が存在したか否かは確認できなかったが、数箇所ボーリングをした結果では、完全な状態では残っていないようである。しかし、規模の類似するSE8とSE12において井戸側があったと推測されることから、SE4とSE14においても設置されていた可能性があるのではないと思われる。

これに対して、A類より規模の小さいB・C類は素掘りの井戸である。B類のSE2から井戸側の部材と思われるものが出土しているが、遺構の項で記したように、これは井戸廃絶時に投棄あるいは埋置されたものと推測される。B類とC類は深さの違いで分けたが、掘鑿時の地下水位の違いにより井戸の深さが変わってくる場合がある。したがって、B・C類は同規模の井戸としてとらえた方が良いのかもしれない。

以上のように規模の違いによる3タイプは、井戸側を設置していたと推測されるA類と、素掘りの井戸であったB・C類というようにとらえることができる。そしてA類とB・C類

の二者、すなわち井戸側を持つか持たないかというのは、何らかの使い分けがなされていたものと思われる。

井戸の堆積土と出土遺物 まず、井戸内の堆積土について検討したい。

SE1とSE5以外は上部層が堅くしまっていたことから、人為的に埋め戻されたものと判断できる。また、土層の堆積状態はSE1とSE5も他とあまり変わらないことから、同様に埋め戻されたと考えられる。堆積土の中にはSE1とSE9以外全てに、表土に類似する黒褐色土層がみられた。その黒褐色土層には、灰や焼土粒子あるいは炭化物を含むもの（SE4・6・7・10・11）がある。SE12では灰層が瓦層をなしていた。

井戸側部材以外のほとんどの遺物は、井戸の中位あるいは中位下部付近から出土している。そして遺物を包含するのは、概ね黒褐色土層か灰層であった。すなわち遺物は、井戸の中位あるいは中位下部に人為的に埋められた黒褐色土層（灰や炭化物・焼土粒子を含むものもある）や灰層とともに、意識的に埋納されたと理解されるのである。

次に、井戸から出土した遺物について検討したい。

井戸出土遺物を列記すると以下のようになる。

- SE2……………珠洲焼片2、土師質土器片2、鉄滓1、礫1、井戸側部材1
- SE3……………薄板材片2
- SE4……………珠洲焼片1、土師器片10、曲物底板片1、杓子片1
- SE5……………土師質土器片15、曲物片3
- SE6……………木片1、赤漆塊
- SE8……………珠洲焼片4、青磁片1、土師質土器片11、彫刻の施された木製品片（鳥形の翼部分か）1、四角柱状木製品1、井戸側部材17、煤が付着した礫3
- SE9……………土師質土器片11、礫1
- SE10……………珠洲焼片1、土師質土器片1、桜樹皮1、木片7、煤が付着した磨石1、焼けた礫1
- SE11……………土師質土器片2、漆器片1、曲物片21、箱物片1、絵描板状木製品片1、箸状木製品1、棒状木製品片（柄杓か）10、四角柱状木製品片1、不明木片2、小枝3
- SE12……………珠洲焼片6、土師質土器片2、表面が炭化した枕8
- SE13……………焼けた礫4
- SE14……………珠洲焼片2、白磁片1、土師質土器片2、木片1、焼けた礫2
- SE15……………木片2
- SE16……………珠洲焼片1、板材片2、煤が付着した磨石1
- SE17……………土師質土器片3

前記したように、これらの遺物はほとんどが埋井時に意図的に埋納されたと考えられるも

のである。そこで、これらの遺物の特徴をみてみたい。

まず、完形品の全くないことが挙げられる。陶磁器や木製品類は全て破片か断片で、それらを復元しても本来の形にもどるものはなかった。また、木製品類ではSE4の曲物底板、SE11の曲物片には煤が付着していた。SE2の投棄あるいは埋置された部材にも、煤の付着が認められる。同様に煤の付着した礫がSE8から、同じく磨石がSE10とSE16から、焼けた礫がSE10・13・14から出土した。

次に木製品類についてみると、曲物片が最も多い。井戸から曲物片が出土する例はよく認められる。汲んだり盛ったりする容器には神霊が籠もり、曲物柄杓はしばしば呪具として用いられ、その習俗は今日に伝承されているとの指摘がある(註3)。曲物や箱物、杓子なども同様の機能を持つもので、呪具としてみなされた側面もあったのではないだろうか。桜樹皮も曲物や箱物などの縦じ紐に用いるものであるから、同様の性格を付したのかもしれない。新潟県内では、上越市高畑遺跡の井戸SE10でも桜樹皮が検出されている(註4)。

彫刻の施された木製品は、鳥形の翼部分と推測される。中世の井戸から鳥形木製品が出土する例は、石川県穴水町御館遺跡や同白山橋遺跡(註5)など能登地方にまとまってみられる。本遺跡出土のものとは形態が異なるが、いずれも組み合わせ式である。天翔ける鳥が神の国と人の世のなかだちをする使者であるとの信仰がみられることから(註6)、鳥形木製品も祭祀的な性格を持つものであろう。

箸状木製品は実用された痕跡がなかった。前記の石川県穴水町白山橋遺跡では、鎌倉時代後半の方形土坑の中から獅子頭・人形・舟形・矢形・鳥形といった祭具が、多量の箸状木製品によって覆われた状態で出土している。この点より、祭具を包含していた状況を重視し、箸状木製品の一用途が、古代の齋串のように聖空間を示すものとの指摘がなされている(註7)。本遺跡出土の箸状木製品も未使用であったことを考えると、祭具として使われた可能性が強い。ちなみに県内では、奈良・平安時代の井戸において齋串が出土している例が幾つかみられる(註8)。

鉄滓がSE2から1点出土している。意識的な埋納か偶然の陥入かの判断は難しい。しかし煤の付着した礫や木製品などのように、火との係わりがみられるものの出土が多いことから、鉄滓もそれらと同義的なものと考えるのが妥当であろう。鉄滓が出土する井戸は新潟県内ではしばしばみられ、特に吉川町樋田遺跡では、中世の井戸331基中75基から検出されている(註9)。

以上のように、井戸出土遺物は、祭具としてとらえられるものが多いことがわかる。

埋井の呪儀 井戸をめぐる祭祀には、掘鑿時の鎮めや汚染による清浄への鎮め、埋井時の鎮め、井戸のうちの霊物(水の神)に対してのまつりなどがある。その中で古代から今日に至るまで、井戸を埋める時に呪術が働き、儀式が行われていたことはすでに指摘されている(註10)。発掘調査に参加しておられた地元の方に聞くと、井戸を埋める際に梅の小枝と草を

中に投げ、井戸の神に対して「ウメてヨシ」との承諾を得ることを、最近まで行っていたとのことである。

本遺跡での井戸出土遺物と、堆積土層との係わりからみた遺物出土状態とを合わせて考えると、そこに埋井の呪儀が行われていたことを指摘できる。先にもみたように、出土遺物の中には煤が付着したり、焼けた痕跡のあるものが多くみられた。さらに堆積土には灰や炭化物、焼土粒子を含む層が多く存在した。したがって呪儀の一過程において、火を用いる行為のあったことがわかる。

ところで、SK18で煤の付着した礫が、SK19で煤の付着した磨石が出土している。これらは井戸において検出された礫や磨石と同様のものである。SK18は底面と壁の下部が若干焼けており、SK19は最下層が生焼けの状態であった。火を焚いた土坑であり、埋井の呪儀の過程に係わる遺構の可能性が極めて強いと考えられる。

以上のことから、埋井の呪儀を復元すると以下のようになる。

まず、井戸側が設置してある場合はそれを取り除き、井戸の4分の1から3分の2程度を埋める。井戸側がない場合も同様に埋める。

次に、破損した木製品や陶磁器類を井鎮具として投入する。この時に、SK18・19においてみられる火を焚く呪儀があり、井鎮具もこの火を用いる過程に供せられたと考えられる。遺物が出土する層はほとんどが黒褐色土層であった。黒褐色土層は現在の表土に類似し、おそらく埋井時の表土であったものと推測される。したがって井鎮具は地面上に並べられ、表土や灰、礫などとともに投げられたのであろう。SE4では土師器片が出土しているが、この時点で混入したものと思われる。

最後に、さらに土を覆い完全に埋め、陥没しないように上からつき固める。

太屋敷遺跡ではこのように埋井の呪儀が復元できた。新潟県内では、井戸の堆積土中に灰や炭化物および焼土粒子を含む層があったり、火を受けた痕跡のある遺物が出土する例はしばしばみられる(註11)。本遺跡と同様な埋井の呪儀は、古代から中世にかけて、県内のかなり広範囲にわたって行われていたものと思われる。

太屋敷遺跡の性格 本遺跡の存続期間は、平安時代と中世(14世紀から15世紀後半)に分かれる。平安時代の主な遺構は土坑と溝であった。溝は自然堤防の裾に沿って延びることから、何らかの区画を意図したものと考えられるが、今回の調査では土坑も含めてその性格は不明である。

太屋敷遺跡が最も発達した時期は、14世紀から15世紀後半である。主な遺構は井戸と土坑で、小穴もこの時期に含まれるものがある。建物跡となる小穴は確認できなかったが、小穴が密集する標高の高い部分は、発掘調査時には地山が30～50cm削られていたので、建物があった可能性は必ずしも否定できないものと思われる。多数の井戸が機能していたことから、本遺跡が所在する「太屋敷」という字名が示すように、中世の屋敷地だったのかもしれない。

上越市子安遺跡では、3棟あるいは5～6棟で構成された建物群に、4基程度の井戸がともなうとされている(註12)。また古川町樋田遺跡では、井戸の分布は建物群とはほぼ一致しており、建物と建物の間あるいは建物群の周辺に分布している傾向があるという(註13)。それにしても本遺跡では井戸の数が多く、その密集度は墓内の遺跡中でも極めて高い部類に属する。昭和61年の確認調査でも、遺構の発掘は行っていないため明言はできないが、井戸と推測されるものが幾つか検出されている。この確認調査区は今回の調査区域の東約20m付近であることから、井戸の分布はまだ広範囲に広がるようである。

いずれにせよ、太屋敷遺跡の性格は今回の調査だけからでは明確な判断は下せず、中世の屋敷地の可能性があることを指摘しておくにとどめたい。西古志地方から蒲原地方へ通じる街道と河港大津をひかえて、交通の要所に位置していたということも本遺跡を考えるうえで重要なことと思われる。今後の調査の成果をまちたい。

註

1. 渡邊ますみ「新潟県における古代・中世の井戸」『新潟考古学談話会会報』第6号 1990
2. 中島宏ほか『池守・池上』埼玉県教育委員会 1984
3. 岩井宏實「遺物の用途」『大阪市立博物館紀要』第10冊 1978
4. 寺崎裕助ほか「北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅲ 高畑遺跡」新潟県教育委員会 1986
5. 西柳嘉章ほか『西川島・I』穴水町教育委員会 1980
西柳嘉章ほか『西川島・II』穴水町教育委員会 1981
6. 金岡悠「神を招く鳥」『考古学論考』平凡社 1982
7. 西柳嘉章「能登の中世荘園村落における信仰—穴水町西川島遺跡群の調査から—」『石川考古学研究会会誌』第27号 1984
8. 上越市一之口遺跡西地区SE153、上越市下新町遺跡SE11、新潟市小丸山遺跡SE3・9、豊浦町豊根遺跡2号・9号井戸がある。
9. 室岡博・戸根与八郎ほか『樋田遺跡発掘調査概報』吉川町教育委員会 1989
室岡博・戸根与八郎ほか『樋田遺跡第二次発掘調査概報』吉川町教育委員会 1990
10. 水野正好「金倉大徳の祝句と埋井の祝儀」『草戸千軒』No58 1978
11. 例えば、上越市一之口遺跡西地区、同今池遺跡、同春日山城跡、同御館跡、新井市坪ノ内館跡、柏崎市鶴巻田A遺跡、出雲町町番場遺跡、吉川町樋田遺跡、須城村中島古屋敷遺跡、新潟市小丸山遺跡などがある。
12. 戸根与八郎・坂井秀弥ほか『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会 1984
13. 室岡博・戸根与八郎ほか『樋田遺跡第二次発掘調査概報』吉川町教育委員会 1990

調 査 組 織

調査主体	寺泊町教育委員会（教育長 長谷川達栄）
調査担当者	寺村 光晴（和洋女子大学教授）
調査員	駒見 和夫（和洋女子大学博物館学研究室）
調査補助員	伊藤 秀和（東洋大学学生） 駒沢 悦郎（東洋大学学生）
調査参加者	長谷川仙二、金子十四大、中島政義、土田三四次、小川勉、金子貞次郎、 近藤隆一、長岡シン、高桑ユキ子、本間ヨリ、高橋ツネ、金子揚子、本間 熊一、土田チヲ
事務局	青木昌栄、加藤輝夫、星博（寺泊町教育委員会）
お世話になった方々	新潟県教育委員会文化行政課、寺泊町、本間信昭、戸根与八郎、藤巻正信、 近藤重次郎、外山辰司、田中正徳、田上寺屋、北新館、丸マルイ、柳吉田 建設、(株)山添組 (以上 順不同)

圖 版



1 太屋敷遺跡全景（西より）



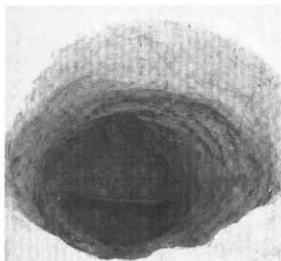
2 第1区全景（北より）



1 第1区東南部分(南より)



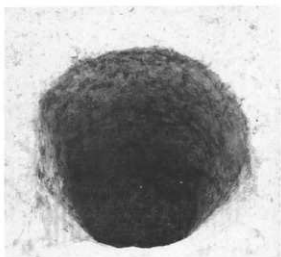
2 第1区北側部分(西より)



1 SE2



2 SE4



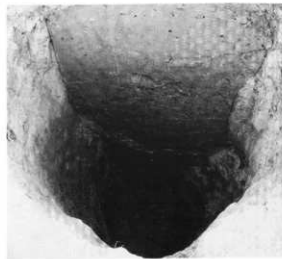
3 SE7



4 SE10



5 SE11



6 SE12 土層断面



1 SK14、中央は礫



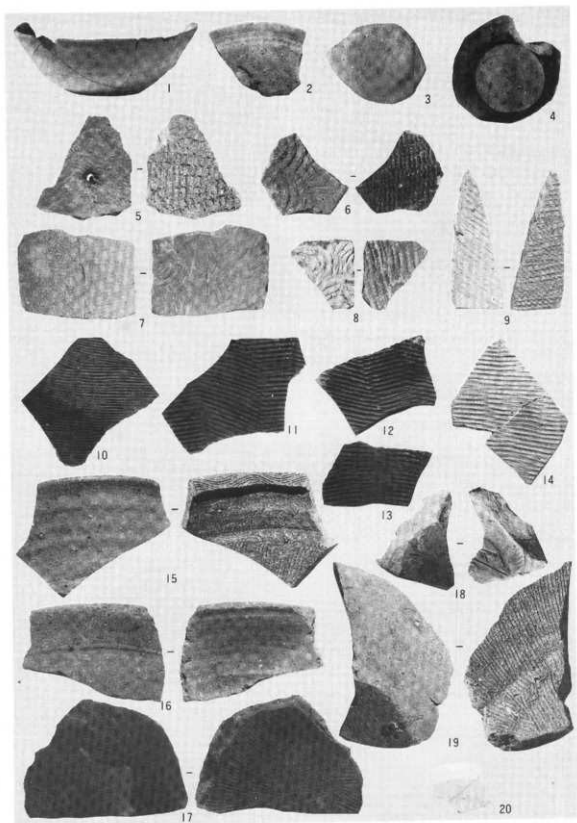
2 同左、礫の下から珠洲焼が出土



3 SX1

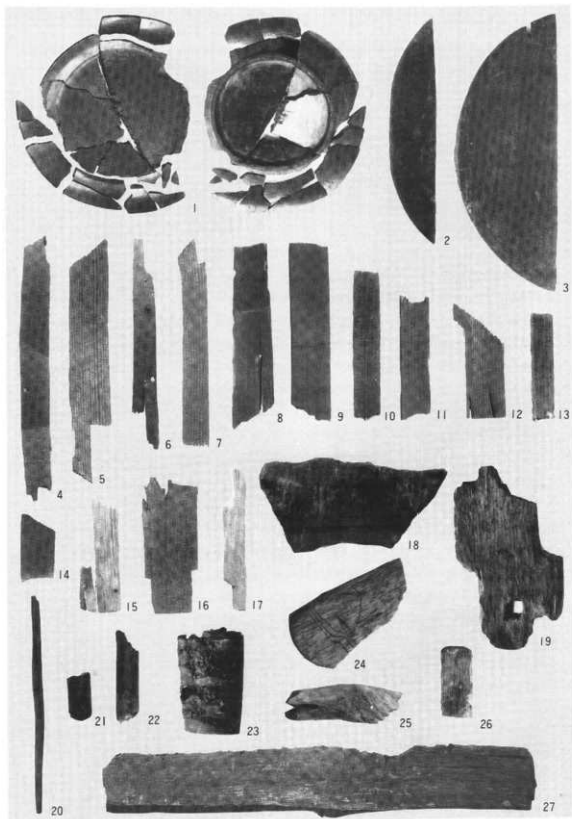


4 第2区全景(北より)



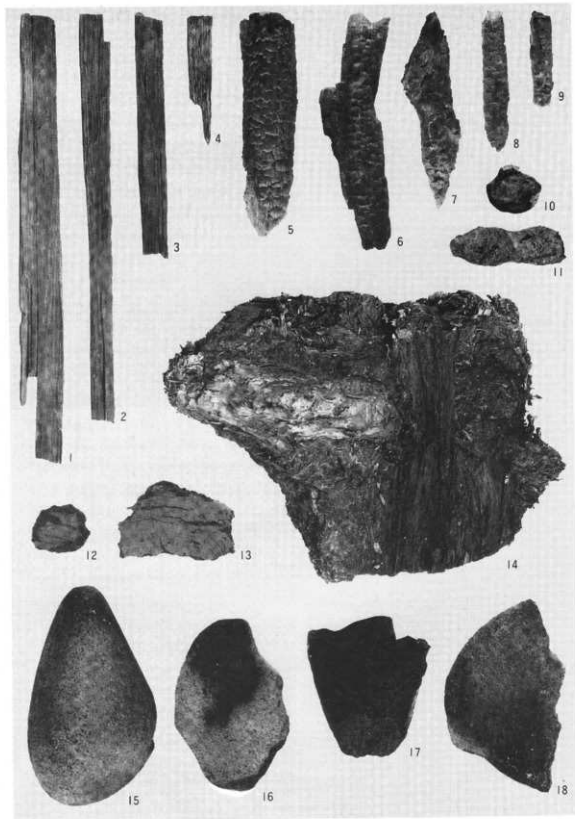
1-4 土器 (1-SK21, 2-4-SK7), 5-9 须惠器 (5·6·9-SD1, 7-SK12, 8-第2区覆土),
10-19 珠洲瓮 (10-SE2, 11-14-SE12, 15·16·19-SK14, 17-SE8, 18-SE10), 20 白磁 (SE14)

(縮尺: 1/5)



1 漆器 (SE11)、2~17 曲物 (2-SE4、3~17-SE11)、18 杓子 (SE4)、19 箱物 (SE11)、
20 箸状木製品 (SE11)、21-22 棒状木製品 (SE11)、23 桜樹皮 (SE10)、24 絵描板状木製品 (SE8)、
25 彫刻の施された木製品 (SE8)、26 四角柱状木製品 (SE8)、27 井戸蓋部材 (SE2)

[縮尺：1~26-1/5、27-1/6]



1~4 井戸側部材 (SE 8)、5~9 杭 (SE12)、10 鉄滓 (SE2)、11 棒状の鉄器 (SD1)、
 12・13 赤漆塊 (SE6)、14 簾 (SE4)、15~18 磨石 (15-SE10、16-SK18、17-SK19、18-SE16)
 [縮尺：1~9-1/2、10-11-1/2、12-18-1/2]

太屋敷遺跡発掘調査報告書

——平成2年度の調査——

平成3年3月25日

発行 寺泊町教育委員会
新潟県三島郡寺泊町
印刷 有限会社 めぐみ工房
長岡市干場 ☎32-7427
